

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-139	A-141	13-114
滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門		
題名 (原題/訳)		
Alcohol use disorders and risk of Parkinson's disease: findings from a Swedish national cohort study 1972-2008. アルコール使用障害とパーキンソン病リスク		
執筆者		
Eriksson AK, Löfving S, Callaghan RC, Allebeck P.		
掲載誌		
BMC Neurol. 2013 Dec 5;13:190. doi: 10.1186/1471-2377-13-190.		
キーワード		PMID
アルコール、パーキンソン病、コホート、長期、疫学		24314068
要 旨		
<p>目的： アルコール摂取がパーキンソン病に対し予防的に働くといった報告や、まったく関連が無いという報告がある一方で、動物実験において習慣的な重度のアルコール摂取がパーキンソン病に関連するドパミン作動性神経に対し毒性を有するという報告もある。本研究ではアルコール使用障害とパーキンソン病との関連を検討した。</p> <p>方法： 1972年から2008年の間にアルコール使用障害(曝露群)、および虫垂炎(非曝露群)にて入院治療を受けた602,930名をSwedish National Inpatient Registerより抽出し、パーキンソン病の発症について最大37年間の追跡を実施した。性・年齢で調整したハザード比および95%信頼区間を算出した。</p> <p>結果： 追跡終了までに1,741名(0.3%)がパーキンソン病を発症し、うち1,083名(0.4%)はアルコール使用障害の入院患者で、658名(0.2%)は虫垂炎入院患者であった。平均追跡期間はアルコール使用障害群13.6年、虫垂炎群17.1年であった。性・年齢で調整後の、虫垂炎群を基準としたアルコール使用障害群のパーキンソン病発症ハザード比は1.38(95%信頼区間1.25-1.53)。年齢層別解析において、44歳以下群で最も高いハザード比を有していた(ハザード比2.39:95%信頼区間0.96-5.93)。</p> <p>結論： 男女ともに、アルコール使用障害の既往を有する者は、そうでない者よりパーキンソン病発症リスクが高値であった。この傾向は低年齢層で強くみられた。</p>		